

## シンポジウム第2部「意見交換会」報告

❖中野貴文（学習院大学）

第1部終了後、15分ほどの休憩をはさんで、第2部意見交換会「どうする！？探究型学習」を開催した。当日、実際に会場に来られた参加者を11のグループに分け、第1部の感想をシェアするとともに、今後の国語教育・探究学習のあり方について語り合う場とした。第1部にオンラインで参加された方々には、話し合い自体には参加できないが、その後の意見披露の時間は再びオンラインで聴講できることを告知した。

研究会のふだんのワークショップと同様、各グループのメンバーの所属・立場等がなるべく多様になるよう調整し、また第1部の登壇者や研究会のメンバーがグループに一人ずつ加わり、話し合いをファシリテートするようつとめた。

第2部全体のファシリテーターである中野から、①自己紹介と第1部の報告を聞いての感想、②探究型学習のアイデア、③高校と大学の連携のありかたについての希望・提案、以上の三点を各グループで話し合ってもらい、および②③については、後ほどグループごとに2分ずつ、参加者全員へシェアするためのプレゼンテーションタイムを設けることを伝えた。

プレゼンテーションについては、それぞれが意見を述べ合った上で、グループごとにアイデアを練って模造紙に記入してもらいよう求めた（なお、各グループのプレゼンターは、第1部の登壇者や研究会メンバー以外の会場参加者の中から選んでもらうよう求めた）。内容は一つのテーマを掘り下げたものでも良いし、様々なアイデアをちりばめたものでもかまわないと伝えたが、別添の通りいずれのグループも自由にイメージを膨らませ、非常に多様で魅力的なアウトプットが披露された。

プレゼンテーションで披露された意見・提言は多方面の話題に及ぶが、ここでは、その中でも比較的多くの関心が集まったテーマにしぼって紹介することを許されたい。まず②探究型学習のアイデアについて、西行法師の出家譚などを本人になりきったSNSで表現してみる実践の紹介は、中高生に身近な発信ツールを用いることで、古典の現代翻案の可能性を感じさせた。次に国語という教科の、全ての教科の基礎となるというハブ的な性格を活かし、地理歴史はもちろん、音楽（例えば和歌の朗詠）や美術（絵巻物）など他教科と連携した探究型学習の模索も提案された。この他にも、古典文学を地域再生のリソースとして活用することを目指した課題解決型学習(PBL)への展開、『竹取物語』における六人目の求婚者を書いてみるといった（第1部でも組上に上った）創作系の実践などが発表され、会場はもちろん、シンポジウム後のアンケートでも、実践の参考にしたいなどといった反応が多数寄せられた。

一方、③高校と大学の連携のありかたについての希望・提案に関しては、とりわけ現状の課題に言及するプレゼンテーションが目をひいた。例えば、そもそも探究型学習に割くべき時間数が足りないこと、どうしても教員と生徒の負担増につながってしまうこと、研究者の研究成果に気軽にアクセスできないこと、などである。かかる高大連携の困難に関しては、後述するように、シンポジウム後のアンケートでも貴重な意見が幾つも寄せられた。

各グループのプレゼンテーションの後は、座席近くの参加者同士で感想を述べ合う時間を設けた後、ファシリテーターが会場を回りながら、(オンラインで寄せられたコメントも含め)所属等がなるべく異なる参加者から適宜意見を引き出していく形でクロージングとした。その後、もう一度アンケートへの回答を呼びかけ、本シンポジウムは閉会となった。アンケートでは、これからの高大連携を考える上で必須となる、重要な視点を示した意見が数多く寄せられたが、本稿ではそれらの回答の中でも特に気になったものを、二点に絞って紹介したい。

先ほども言及した通り、第2部の参加者によるプレゼンテーションだけでなく、その後のアンケートにおいても、高校(授業者)と大学(研究者)の間に立ちほだかるすれ違いの存在を浮き彫りにするような回答が散見した。高大連携の需要は確かに存在しているものの、まず「取っ掛かり」がつかめないという指摘が相次いだ。例えば高校の側からすれば、各専門の研究者に対し、どのようにコンタクトを取ればよいのか判然としない。オープンキャンパスに加え、各大学・各研究者による動画配信も増えてはいるが、それらは意欲ある一部の者しかコミットできず、また一日限りの特別な「イベント」として消化されてしまうという憾みも残る。一方、大学の研究者による、研究内容のアウトリーチも、積極的になされているとは言い難い。また、研究の深化は同時に細分化・蛸壺化にもつながっていく。中高の古典の授業現場において、自身の研究がいかに活用できるか、深くリフレクトしている研究者は、決して多いとはいえない。高校、大学とも個々の教師・研究者の意識だけでは解決できない部分も多く、システムとして、「恒常的に」両者をつなぐ体制の構築が急務であろう。なお、本研究会のワークショップも祝祭的・一回的な性格が強く、高校の授業という日常的な学びにいかに関係するかという課題に対し、ここ数年模索を続けている点を付記しておく。

加えて、会場でもアンケートでも最も多くの関心を集めたのが、探究型学習の評価の難しさ、大学入試との相性の悪さへの言及であった。西岡加名恵『新しい教育評価入門』が指摘しているように、「現代の教育評価が直面している大きな課題の1つは(中略)総括的評価が、教育への政治的な要求に基づきハイ・ステイクス化し、本来、学校教育において中心に位置づくべき、形成的評価の実現を妨げている点」にあらう。これもアンケート等が出されたように、探究型学習を正解のない学び、大学入試を唯一の正解のある学びとして、安易に二項対立的に捉えることは必ずしも適当ではないが、両者の懸隔への戸惑いは、受験指導に携わる高校現場の声として、至って切実なものがある点は看過されるべきでない。いったい、探究というものが従来の枠組みを問い直し、ときにそこから逸脱しようとする性格を有する以上、既存の知識注入型の授業との相性の悪さを潜在的に有していることは否定できないであらう。探究自体が自己目的化することを防ぐためにも、本シンポジウムのような、高大、さらには小・中も含めた各現場の教員がともに言葉を交わし、情報を共有できるような場を恒常的に設けることが喫緊の課題と思われる。

最後に、これもアンケートで提案された指摘だが、上述のような共有の場を継続的に設けるために、オンライン配信等を活用して機会を増やすことも望まれよう。オンラインの利用は、移動等の労を削減することで、ただでさえ多忙な教員の時間的・身体的な負担を減らすことにつながるだけでなく、大学との連携が容易ではない地域の中高と大学とを結ぶことによって、教育機会の地域間格差を埋める一助となり得るからである。

如上、大学がすぐ近くにはない地域の高校、あるいは大学進学者がほとんどいない高校など、本来、学校現場といっても極めて多種多様である。研究者の側から高大連携といった際に、今述べたような高校の存在を外して議論してはいないだろうか。これら教育現場への解像度を上げるためにも、本シンポジウムのような連携の模索が今後もなされることを期待し、本稿のまとめとしたい。